
どうにかなるよね！てか何が何でもどうにかする！！！！

彩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

どうにかなるよね！てか何が何でもどうにかする！！！！

【Nコード】

N4141X

【作者名】

彩

【あらすじ】

恋愛にまったく興味なし、自分の恋愛に関して超鈍感な燈堂沙月とどうなつきが交通事故にあい、異世界トリップ！！イケメンに囲まれあっちでバタバタ、こっちでドタドタ、そっちじゃガラガラガッシャーン！！逆ハーレムのラブコメ（なるかわかりませんが…orz）です、色んな男子をとりそろえたいと思っております（＊＾―＾＊）処女作です。文才がなく、まだまだ未熟ですがよろしくお願いいたします＞（―）＜

1、プロローグ（改）（前書き）

こんにちわ。与市の妹です。更新は亀なみで週1，2話更新できればと思っております。

1、プロローグ(改)

ここどこ…？私は誰？燈堂沙月、18歳。うん、記憶はだいじよぶみたい・・・

「おっはー」

「・・・おはようございます」

「びっくりしないの？」

「挨拶くらいかえしておこうかと。てか、ここどこ？なんであたしはここにいんの？」

「あれ？憶えてない？そっか・・・、じゃあ説明してあげる」
「なんかこいついちいち上からっものいつてくるなあ、何様だ！」

「えっ、神様？ちなみにここは天国で君は交通事故で死んじゃったの」

「え・・・、神様？」

「ツツコむところこそ？まあいいや、説明にもどるよ？」

「死んだとこツツコンでも生き返れるわけじゃないじゃない」

「てか説明さっさとしろよ、いちいち発言につつかかってくんじゃねえ」

「君がいちいちムカつくこと言うからだよく。」

「・・・人の心勝手に読むな！プライバシーの侵害だ！」

「いまさら。どこまで話したつけ？ああ、君が死んじやったって所か。で、君がなんでここにいてい・・・う・・・と」

「いうと？」

「君が前世でイイことしたから二度目の人生をあげよう！！ってことになって・・・、でも容姿は変わらないから安心していいよ。で、今から君をとばす所は異世界だから。イケメンいっぱいだよ！！うれいでしょう？」

うれしくねーよ！！イケメンとかキョーミないっつっ！

「いってらっしゃーい」

展開早いな、ああ変な浮遊感、気持ち悪い・・・
神様助けて・・・神様ってアイツか！頼りにならない・・・

まあ、どうにかなるよね！！

1、プロローグ（改）（後書き）

読んでくださってありがとうございます！！！！！！！！！！

書き方直して、内容もちよつと変えました。

これからも読んでくださるとありがたいです！！！！

2、面倒なことになりそう・・・

ん〜なんかあったかくて気持ちいい・・・
あったかい!?

うわぁ・・・イケメーン、綺麗な銀髪。だが上半身裸だ・・・。
してあたしを抱きしめてる・・・。

「・・・ん。もう起きてたのかお前」

あ・・・起きた。起きたならあたしから離れろ!!

「はあ、まあ。てゅーか離してくれませんか？ 苦しいです。」

「ああすまん。」

やっど解放された・・・。ところで誰？

「ところでお前は何者だ？ なぜ俺の部屋にいる？」

「人に聞く前に自分から言えば？」

「・・・ああそうだな。俺はレオナルド・アーノイド。アーノイド
王国第一王子だ。で、お前は？」

微笑んでるけど黒いオーラが見える（；一―一）しかも、第一王子
だって。失礼な口きいちゃったよ、まあいいや。

「あたしは燈堂沙月18才、サツキって呼んでください。信じても
られないかもしれないけど異世界からきたんですよ、殿下。」

「殿下は無しだ、レオと呼んでくれ。様も無しだからな、あと敬語
も」

「わかったわ、レオ。これでいい？」

「ん、ところでサツキ、これから行くところあるのか？ ないならここにいい。客間と服を用意させよう。」

マジ！！住むとこどうしようか悩んでたんだよねラッキー。

「ありがとう！！」

満面の笑みで言うところのレオの頬が赤くなった。熱でもあるのかな・・・？

大丈夫かきいてみると「何でもない！！」と言って顔をそむけてしまった。

ホントに平気かなあ？

2、面倒なことになりそう・・・（後書き）

読んでくださってありがとうございます＞（―――）＜
レオナルドは身長182cm銀髪蒼眼です。髪の毛は短髪。ツンデレ体質（笑）沙月は身長165cm黒目黒髪です。髪の毛は肩ぐらいまであります。性格はさっぱりしてます。
B型です。

3、ボンツキュッボンツ!

「まずサツキの服だな。」

||チリリン♪||

レオがベルを鳴らした。誰かくんの?

「おはようございます殿下。……そちらのお嬢様は?」

・・・出た!! 美人なメイドさんだ!!! しかもスタイルめっちゃいいよ!?! まさにボンツキュッボンツだよ!!

チラ・・・あたしのさびしいな……。あ・・・ココロノアセガ・

・

「ああ、サツキといって異世界から来たらしい。今日からこの城に住むことになった。サラ、お前を世話係に任命する。」

「かしこまりました。よろしくおねがいたします、サツキ様。」

「サツキ、この者はサラ。今日からお前の世話係だ。」

マジ!? このナイスバディーなおねーさんが世話係!? 毎日落ち込めと!?! 自己嫌悪におちいれと!?!

・・・まあいいや!!

「こちらこそよろしく申し上げます。あのーサラさん、敬語と様いらないです」

「いえ、そういうわけには・・・」

「お願い! あたしも敬語とさん無くすから!! ねっ?」

「では様だけ・・・」

よっし!! 敬語はダメみたいだけど様なくなったらしいよね。

「サラ、いきなりで悪いがサツキに服と客間を頼む」

「かしこまりました。サツキ、お部屋にご案内いたします。」

「あ、うんわかった。」

部屋かぁ……。どんなだろ、楽しみだな／＼／

「着きました。ここがサツキの部屋です。」

……。なんなのここ。広すぎでしょ！！豪華すぎでしょ！
？お姫様ベッドだし、クローゼットは五つあるし、電気はなんかこ
う……。おしゃれだし！！（あたしの頭じゃ言葉に言い表せられ
ない！！）

「では着替えましょうか。」パンパン

サラが手を叩くと3人のメイドさんが……。なんなの！？この国の
女性はみんなボンツキュッボンツなの！？もう再起不能かも……。
……（泣）

3、ボンツキュッボンツ！（後書き）

読んでくださってありがとうございます＞（「」）＜
サラは身長168cm金髪碧目です。髪の毛は頭の上の方でお団子
してます。

次話も読んで頂けるとうれしいです。

サツキ…「次回もよろしく！！ナイスバディーなおねいさん見ても
くじけないように

頑張るよ！！」

レオ…「次回は新しい男が出るらしいぞ。……………だがサ
ツキは渡さん」

サツキ…「え？レオ何？」

レオ…「え？あ、いや……………なんでもないぞ！！そうだ、うん、な
んでもないぞ！」

4、ビラビラ

「「「サツキ（様）！ 暴れないでください！！」」「」
「いやいやいや・・・。無理無理無理！ 絶っつつつつつ対無理イ
イイイイイイ！！！！！！」」

なぜあたしがこんな状況になっているかというと・・・・・・

〓三十分ほど前〓

「では、私たちはサツキのお洋服を選んでまいります。
「うんわかった！！」

どんながあるんだろ・・・ドレスとかワンピースとかかなあ？
・・・なんかクロゼットの方からはしゃぐ声が聞こえる????

「サツキにはこの黒いのがよくありません？」

「いやでも、こっちの白い方がアノ綺麗な黒髪を引き立てませんか
?？」

「ええでも、深い緑も・・・」

「いやいや、黄色の方が・・・」

「いや俺的には、このピンクでレースが付いているやつが好きな
だけど・・・」

・・・誰だし！！！！！！? ??? 「俺」 って誰! ? 「俺」
って! ?

しかも、あたしの服選びに参加してるよ! ? ピンクのビラビラ! ?
! ? ! ? ! ? ! ? ! いやでもサラたちが反対して

「「「いいですわ〜〜〜〜!!!!!!」」」
くれなかったああああああ!!!!!!!!!!!!
なぜ!?!? WHY!!!!

「サツキ! 決まりました!」

・・・はい!! 予想的中ううう! ピンクだああああ! ビラビラだああああ!!!!

「あ、アイム様は出てくださいね」
「はいはい、わかってますよ」

アイムってさっきのあれか!? このビラビラピンクを推した奴か!?
よしどんな顔か見てや・・・る・・・。
・・・出たよ美形! 何なの!? あの無駄に整った顔!! ウゼえ!!
(↑?)

「サツキ、こちらの方は殿下の騎士様でアイム様と言います」
「よろしくね、サツキちゃん。俺のことはアイムって呼んでね。着替えたら後で見してね☆」

|| バタン ||

アイムさんは出て行った。なんか疲れたな

「サツキ、着替えましょう!」

忘れてたああああああorz

・・・ということがありました。で、十分くらい前からサラたちを説得中!!!!

「もうちょっと地味なのがいいの、お願い!!」

「・・・・・・仕方がありませんね。嫌がる服を無理やり着せるのはよくありませんし・・・・。」

「ありがとうございます!!」

「では、これを着ましょう」

サラが出してきたのは青いシルクのワンピース。

これくらいならいいかな？体の線わかんないし・・・・。

「うん、わかった」

「着替え中」・・・・少々お待ちください・・・・

「似合いますわ、サツキ様。お体綺麗ですのね〜〜、羨ましいですわ!!」

あなた方のほうが綺麗です・・・・。

ていうか！これドレスだった!!しかも体の線わかる!!!!

最悪・・・・（泣）

「お〜可愛いじゃん!!似合ってるよ。でもさっきの方がよかったなあ・・・・」

「いやです!!あたしああいうの苦手なんです!!」

「え〜〜、可愛いと思うんだけどなあ」

なんかこの人と話してると疲れる・・・・

4、ピラピラ（後書き）

読んでくださってありがとうございます！！

アイムは身長189cm赤髪赤茶目です。性格は女たらし（笑）

次回も読んで頂けるとありがたいです！！

5、やっぱDNA？

「なぜ、お前がここにいる？アィム」

「おゝレオじゃん！！かわいいくない？？サツキちゃへブツ！！」

「何でおれより先に・・・・・・っじゃなくて！！サツキ、国王との謁見だ。服はそれでいいな？」

「う、え？あ、うん平気。」

て、展開の速さに頭がついていけない・・・、しかも国王？？やだなゝゝ「フハハハハハハハハハハ！！！跪け！！愚民共！！（？）」「みたいな感じだったら・・・

「サツキ、大丈夫ですよ。陛下はお優しい方です」

「そ、そう？じゃあ安心だなあ」

「・・・では行くぞ」

「うん！」

Ⅱ謁見の間Ⅱ

「ようこそ、アーノイド王国国王のクラウイン・アーノイドだ。よろしく頼む。」

「あ・・・はい。」

国王すげー！！！！！！綺麗だよ！！！！イイ声だよ！！！！てかさあてかさあてかてかさあ！！！！

やっぱレオが美形なのもDNAな感じ？？すげー

「サツキはここに住むそうだがそれは誠か？」

「はい、レオ・・・様に良いと言われたので・・・」

もしやダメ的な・・・？

「そうか！！大歓迎だ！！うちにはむさ苦しい男どもしかいなくてな、サツキのような娘がいれば私もうれしい。自分の家だと思ってゆるりとするといい。」

「あ、ありがとうございます！！！」

・・・いよっしゃー！！！！国王太っ腹！！

「では私は執務に戻らねばならん。ではな・・・レオ頑張れよ！！！」

「っうっせー！！！！！！！！！！タヌキ親父！！」

「ハハハハハハハハ・・・」

なんか明るい・・・てか何を頑張るの???

「サツキちゃん、お昼も兼ねてお茶しない??」

「うん、するする！！！」

やったね、お腹すいてたんだよねエ。

・・・いつの間にかタメ口になっちゃったけどいいよね！！

「俺も行く。」

「え~~~~レオも来んの?・・・せっかく二人きりになれると思つたのに・・・」

「!!!!!!なおさら行く!!!!誰が、んなことさせるか!!!!」

「ねえ、お腹すいたからいい加減にしてくれる?」

「「・・・はい」」

いやあ、楽しみだな。どんな料理が出るんだろう／＼／

5、やっぱDNA？（後書き）

読んでくださりありがとうございます！！国王は銀髪紫目の身長187cmです。

声は渋カッコイイ（笑）次回！！サツキが・・・次回も読んでくださるとうれしいです！！

サツキ・・・「次回はあたしがバトルして・・・」
レオ・・・「まったくあいつは・・・！！」

6、お茶会でバトル!!

えー現在お城の中庭にいます。広い！広すぎる！こっちに来てから何度このセリフを言っただろうか・・・！！なぜこんなに広いの！？

「サツキ？おいしい。だいじょぶか？」

「・・・ハッ！！なんで！！ねえなんで！！？」

「な、何がだ！！ってゆーか手えはなせ！！く、首が絞まってる！！」

「ああごめん、無意識にやってた。」

「ゴホ、ゲホ！！ぜえはあ・・・。気をつけろ！！無意識とか恐ろしすぎるぞ！？」

「まあいいじゃん、レオ。次期国王がそんなじゃ駄目だよ？ね、サツキちゃん」

「そうそう！！話それるんだけど、これおいしいね！！なにこれ！！」

レオとアイムがちよつとしゃべってる間に3品目ぐらい食べてたあたしがおいしいと言ったのは、チーズみたいのをカリッカリに焼いてその上にトマトソースっぽいのをつけたピザっぽい形状のもの。味もチーズとトマトを合わせた感じ

「それはクリンという食べ物だよ。ペグという固形乳製品を溶かしてカリッカリに焼いて、ツイルーという果物をペースト状にしたのをぬったやつ。その上にこれのつけるとうまいよ。」

アイムが渡してきたのはバジルみたいの。それを一つまみクリンにのせて食べる。

「おおーいしいー!!」

「でしょ？」

バジルみたいなやつはピリツと辛くてクリンのおいしさを引き立てる。

いやーうまい!! あたしがクリンをもう一枚食べようとしたその時・
・・

「うわっ!!」どたーん!!

「「えっ!?! レオ!?! (殿下!?!)」」

レオの方を見ると

「レオナルド様!! 会いたかったですわ!!!!」

すごい綺麗なお姫様がレオに抱きついてた。レオだいじょぶ???

「リランキルト様!! 離してください!!」

「いやですわ、あたくしのことはリラと呼んでください」

アイムはうわーみたいな顔してるし、サラはあらあらみたいな顔してる・・・。えーと話が読めない・・・。

「あら? そちらはどなたですの？」

「人に聞く前に自分から言ったらどうですか？」

「これは失礼いたしました。あたくしは、リランキルト・ドルクス、隣国の姫ですの。そして、レオナルド様の妃候補ですの。あなたは
?」ニッコリ

わぁ黒い笑み、あたしに怒ってんのかしら?

「あたしは燈堂沙月、サツキがファーストネームでトウドウはファ

ミリーネーム。好きなように呼んでください。」

「身分は？」

「は？身分？」

「まさか身分がないなんて言いませんわよね？レオナルド様やアイム様、メイド長のサラまでついているのに。さあ、身分は？」

「レオ、あたしの身分って何？」

「サツキの身分？俺の友人だ。」

「レ、レオナルド様！？その娘のことを呼び捨てにしてるんですの！？ファーストネームで！！なぜあたくしの事は呼び捨てにしてくれないのになぜこんな娘のことを！？こんな貧相で地味で図々しい娘のことを！！」

「リランキルト様！！」

「リランキルト様でしたっけ？」

「え、ええそうよ、でも気易く呼ばな「あんたに、こんな娘呼ばわりされる筋合いねーよ」

「「「・・・は？」」」」

「だから、あんたにこんな娘呼ばわりされる筋合いなんて言ってるの。さっきからキーキー、キーキーうるさい、身分がなんだー、呼び捨てがなんだーって。」

その上人のこと図々しいだ？貧相で地味なのは認めよう、でも図々しい奴に図々しいと言われたくない。」

「ぶ、無礼ですわよ！！あたくしを誰だと思ってるの！？あたくしは」

「世間知らずでKYで図々しくて自己中心的で考えなしのお姫様。」
「・・・」

リランキルト様は顔真っ赤にして涙目で震えてる。ちつと言い過ぎたかな？

まあ、このお姫様にはいい葉でしょ。

リランキルト様は首がもげんばかりの勢いで首をぶんぶん振っている。

目えまわんないのかな、脳震盪起こしたりしないといいけど……。

おっ、レオが戻ってきた。え！？リランキルト様をお姫様抱っこしてる！！

そんなに仲良くなったのか、良かったね！リランキルト様！！

「泣き疲れて寝オチした。」

「えゝなんだゝ2人がラブラブになったのかと思ったのに……」

「なっ！？俺はなあ！！」

「わかった、わかった。その姫さんのこと苦手なんですよ？知ってるよ。」

「……わかってねえ……！！！！！！」

あれ？レオの元気がない。どうしたんだろう……。まあ明日になれば直ってるよね。

6、お茶会でバトル!! (後書き)

読んでくださりありがとうございます!! リラは金髪でエメラルドグリーンの目です。

身長は160cmです。身長はサツキより小さいですが胸はサツキよりでかいです(笑)

次話も読んでくださると嬉しいです。

アイム…「いやゝ相変わらずサツキちゃんは鈍感だなあゝ」

レオ…「まったくだ。こっちの身にもなれっつーの」

アイム…「俺もあんだだけ鈍感だと大変だ(笑)」

レオ…「まさかお前、サツキのこと……」

アイム…「次回もよろしくね!」

レオ…「お前ってやつは……!!」

***番外編*レオ・・・?どうしたの? (前書き)**

お気に入り登録してくれた皆さま!! ありがとうございます!!
これからもよろしく願います!!

***番外編*レオ・・・?どうしたの?**

「おやすみなさい。」

「おやすみ、サラ。」

|| バタン ||

あゝ長い一日だった。疲れたなうてか今日一日目?
こんなに長かったけ、一日って・・・。

|| コンコン ||

「ん?」

窓の方からノックの音・・・うえ!?レ、レオ!?
なぜに?

「レオ!? どうしたの、こんな夜更けに。」

「ん、いや・・・ちよつと、な。」

ん? 気のせいかな? 顔が赤い? 熱でもあるのかな?
そういえばこの前も・・・風邪だったりしたら大変!!

「レオちよつと来て!!」

「え!? あ、ああ。」

|| コツン ||

「は!?! え!?! なにす」

「動くな!!」

「いや、なんでいきなり顔を近づけてくるんだ!?!」

「え? 顔赤いから風邪かなって思ってた。」

「ち、違う!! 風邪などひくほどヤワじゃない!!」

「そう？じゃあ良かった。」

風邪じゃないならいいや。

てか、なんであんなに焦ってたんのかなあ？あれ？レオが背中向けてる、なぜに？

「あの、サツキ・・・」

「ん？何？」

「もののすごく言いにくいんだが・・・」

「だから何？はっきり言って。」

「その・・・寝巻が透けている／＼／＼」

「・・・ええっ!？」

これは焦った。すぐレオに背中向けたし、レオも背中向けてくれてたけど・・・

・・・はるかCー!!!! (↑古い?)

「あ、あのなんかすまん・・・」

「い、いやこちらこそ？」

「・・・」

「・・・」

か、会話が続かない・・・ (汗)

どうしよう、気まず過ぎる!!! うわー!!! この沈黙が痛い!!!!!!

「サツキ、お前は無防備過ぎる!!!」

「は!?!? 何!?!? いきなり!!!」

後ろを向くと抱きしめられた・・・。どうしたの？

眠いのかな?・・・まさか! 実はさみしい!!! 「母上にあいたい」

てきな!?

「お母さんの所に行きなさい!」

「・・・何がだ?」

「なんでもない。てゅーか離して。」

「いやだ」

即答!?

そんなにさみしいのか!? レオよ!!! でも心を鬼にせねば!!! (↑
なんで by 作者)

「は・な・し・て」

「・・・わかった」

やっと離れた。なんだったんだよ、もう!!

こんなところをあの嬢ちゃん(リランキルト様)に見られたら大変
じゃないか!!!!!!!!!!!!

「・・・じゃあな。」

「うん。おやすみ」

「ああ、いい夢を」

なんかレオの顔が近い・・・

「うをおおおおおお!? 何すんの!?!」

「寝る前のキ」

「それ以上いうなあああ!!! 自覚したくない!!!!!!」

「口の方がよかつ」

「早く自分の部屋に帰れ!!!!!!!!!!」

「わかったよ、おやすみ」

さっきの焦りはどこえやら。

レオは余裕なクスクス笑いで去っていった。窓から

・・・・・ホントになんだったんだよおおお!!!!!!

!!

***番外編*レオ・・・?どうしたの? (後書き)**

読んでくださりありがとうございます!!

今回はレオがぶっ壊れましたね。抱きしめられあたりからは打ってはずかしかったです。次話もよろしく願いします!!

7、忙しいiiiiiiiiiiii!!

いやー昨日はいろいろあって大変だった……。今日は何しよう、庭の探索?…。やっぱやめところ。迷子になったら嫌だし。

あゝ暇だなあ、ひまひまひまひまひ

||コンコン||

「ん? 誰だろ?…。はゝい」

「あたくしです、リランキルトですわ。」

「どうぞ。」

……。あのお嬢ちゃんか。

いい暇つぶしになりそうだな!! ふふふっふふっ

「いらっしやい。で、どうしたんですか?」

「……。なさい」

「え? なんですか?」

「き、昨日は、ごめんなさい……。失礼なことを言って……」

「……。ああ、いや氣にしてねえっす……。」

「何よこっちが謝ってんだから素直に受け取んなさいよね!!?」

「ツ、ツンデレ……。?」

「なによ、ツンデレって」

「リランキルト様みたいな人のことですよ。」

「リラよ。」

「へ?」

「だ、だから!! リラって呼んで。あと敬語も無し!!」

ツ……。ツンデレだあああああ!!……!! かわいい!!

ツンデレ萌え!!!!

「わかった、リラね!!! あたしはサツキね!!! じゃあ、友達ってこととでよろしく!!!」

「え?・・・ええ、よろしく!!!」

あたしたちは握手を交わした。

(f i n・・・)

終わらせねーよ!? (我が家風) 何勝手に終わらせてんの!? まだまだ続くよ!? ふう・・・取り乱してしまった・・・。本編に戻ろう←)

「ところで、朝食はすませた?」

「いいえ、まだ」

「じゃ、食べよ。サラッ朝ごはん」

「はい、かしこまりました。」

数分後

「おまたせしました。」

「わーい、いっただっきまーす。」

「いい食べっぷりだな。とてもレディーとは思えん。」

「はへ? (誰?)」

「ああこれは失礼した。俺は、シェフのエドワード・シュベールだ。」

「むーん、ひよひよふいふほえふあいじまふ(ふーん、よろしくおねがいします)」

「ああ、よろしく」

「なんで、言ってることがわかるんですの・・・?」

「なんとなく、だな。」

てか、こいつも美形だな!!! もう諦めよう・・・うん・・・あき

らめよう!!

でも初の黒髪だぁ……。まあいいや、食べよう!!

「もぐ、んこれおいしい。んぐんぐ、あ、これもおいしいな……

あ、これも……。これも……」

「そんなにうまいか？」

「ごくん、おいしいよ。全部!!」

「そうか、それはすべて俺が作った。」

「ええ!? マジ!? すごいんだね意外と。」

「意外とはなんだ、失礼な奴め。」

「サツキ、あたくしの存在忘れてませんこと?」

「え……。そんなことないよ?」

「嘘ですわ、どーせサツキにとってあたくしなどちっぽけな存在な
んでしょう……。」

「いやいやいや!! ちがう!!」

「うえーん!! ひっく……。うえ……。っ……。」

「あゝあ泣かせちまったな」

「うるさいな!! ごめんね? リラ、ごめんね? ね?」

「う……。ん、わがった……。」

ああよかった……。泣きやんだ……。

「おいしい、サツキ!!」

「サツキちゃん!!」

あ、レオとアイムだ。どうしたんだろう。てか何をしに?

「何しに来たの」

「「会いに来た。」」

「リラに?」

「ホントですよ!?! レオナルド様!?!」

「おい!! サツキ!! 俺はな? 俺はお前に」

「きゃあ~~~~~~~~~~~~!!」

「「「!?!」」」

「む、むむむむむ虫!?!?!」

「「「虫・・・」」」

ああ、虫か。大げさだな、虫くらいどこにでも・・・

「だーれーかー!! いや~~~~~~~~!!?!?!」

・・・うるさいな、あ・・・れ・・・なんか頭痛くなって・・・
き・・・た・・・。

「サツキ!?! おい、どうした!?! サツキ!?!」

れ・・・お・・・?・・・
・・・。。

7、忙しいiiiiiiiiiii!! (後書き)

お読み頂きありがとうございます!!

エドワードは黒目黒髪、身長189cm性格はクール?ですかね?
目は切れ長です!!

次話も読んでください!! お願いします!!!!!!!!

8、風邪って馬鹿でもひくんだね・・・!!!!

「・・・・・・・・ん。ここどこ・・・？」

このセリフどっかでいった気がする・・・。

つかここは？なんか見覚えが・・・レオの部屋か！！ってことはココはレオのベッド？ナンデダああああああああああ！！！！！！

「サツキ！！はあ、起きたか・・・。良かった、いきなりぶっ倒れるから驚いたぞ。」

「ぶっ倒れた？」

「ああ、リランキルト様が叫んだ瞬間な。しかも熱まで出て大変だったぞ、リランキルト様は泣き始めるし、サラはあたふたして、アイムはすんげー不機嫌になるし。」

「ごめんね、めーわくかけ!!バン!!!!」

「「「サツキ(ちゃん)!!!!」」」

「はい!?!」

なんかいっぱい入ってきた、サラとリラとアイムと・・・誰？

ん？眼鏡かけて白衣？ああ、医者か・・・。美形だね!!!!!!
あゝもうヤダ!!!!立ち直れなくなる・・・(泣)

「調子はどうですか？吐き気や頭痛は？」

「いや、ないです。どっちかってえと、いたって良好です。」

「そうですか、ちょっと失礼・・・。」

おでこに手を当ててきた、なんすか？
あゝ、手が冷たくて気持ちいい。

「まだ微熱があります、風邪ですね。今日一日は大人しくしててください。」

「はーい。あ、あたしサツキって言います。あのーまだ名前聞いてないんですけど・・・。」

「ああダメじゃないですか、殿下。教えてあげなきゃ。」

「俺か！？俺が悪いのか！？」

「当然です。」

「即答だな!？」

「サツキ様、僕はウィルザード・シュベールと言います。」

シュベール？どつかで聞いた覚えが……いやいや……似ても似つかないナ、なんかこー、オーラとか物腰が違うよね、うん。顔も……、

似てないよ、うん……似てない y

「この城のシェフ長、エドワードは僕の愚弟です。」

マジでー！！！！！？？？？？
 ？？？

何？どこのDNAをどう組みかえたらこんなに違う性格になるの！？
あたしそれが知りたい！！！！！！

「サツキちゃん？ どうしたの？」

「い、いや！ ナンデモナイヨ？」

「そう？」

「そう！」

「DNAを組みかえただけでは性格は変わらないと思いますよ？」

「へ！？なんのことですか？」

「顔に書いてありますよ？面白いですねエ。」

え、Sだ!!どSだ!!

クスクス笑い怖い!! 敬語攻め怖い!!!!!!!!!!!!!!

「す、すすすすいません!!」

「いえいえ気にしてませんよ? どちらかというところちが謝らなければいけませんね、すいません。」

「は、はい!!」

し、心臓に悪い……。こわいよこの人苦手だ!!

「それでは失礼します。」

やっと出てった、ああ疲れた。でも、風邪かあ……。 (いまさ
ら)

「風邪か、馬鹿でも風邪はひくんだな。」

「そうだな……。しつれーな!! あたしが馬鹿だとも言いた
いの!？」

「ん? 今の言い方でわかんないのか? やっぱり馬鹿……。
うわあ!？ お、落ち着け! サツキ!! 落ち着け!？」

「人のことをよくもばかにしたわね、成敗してくれる!!」

「うわああああ!？ ば、おま!! おろせ!! んなもん持ちあげんな
あああ!？」

「うっさーい!!」

「どうわ!? 病気じゃねーのか、お前!! テーブルなんか持ちあげ
んなって!!」

どわ!! 投げるな!!」

「だあまあれえ!! 死ねええレオ!!」

「うっわ!!」

!! ジャキン!! !! !! ドサツ……。 !!

「あつぶね……。 お前!! 俺が切らなくて当たったら即死だぞ
!？」

「だいじよぶだよ。……。 チツ!!」

「え!?! 何今の音!?! チツって音したんだけど!?!」

「えっ? 気のせいじゃない? チツ」

「あ—————— ナニモキコエナイ—————!?!?!」

ちよつとイジメすぎたか。まあいつか☆

そーいや、おなかすいたなあ

「今何時?」

「えーっと、午後二時です。」

「あたしそんなに寝てたの!?!」

「ええ、四時間ほど倒れてましたわ。心配しましたのよ!?!」

「うん、ごめんね。」

「いつの間にそんな仲良くなったんだ?!」

「「朝」」

「あ、そ」

どしたん? レオ? あゝお腹すいた。

「サラさん、俺おなかすいちゃったなあ?」

「かしこまりました。サツキにも持ってきます、皆さんの分も。」

「よろしく」

あゝお腹すいた。

8、風邪って馬鹿でもひくんだね・・・!!!(後書き)

よんでくださりありがとうございます!!

ウィルザードは黒髪桃色目、身長190cm性格わかんないです・・・。

今回はリラとサラとアイムの出番が少なかったですね。エドワードに限っては0ですね。次回は登場人物紹介です。次回もよろしくです。

9、久しぶりの割に登場時間少ないね！

「はあ、おいしいねこのスープ！」

「ありがとうございます。」

あたしがいま食べてるのはサラが作ってくれたスープ。なんかこーね！おふくろの味的なね！！

そーゆー味がします！・・・で、なぜだかみんなも同じもの食べます、なぜでしょうね！！

「何でみんなあたしと同じもの食べてるの？」

「「「サツキ（ちゃん）が食べてるから」」」

「・・・そっすか・・・」

チツ、みんなが食ってんのつまもうと思ったのに・・・（結局それ）、しゃーない、諦めよう。

あーーーーーーお腹すいたなあ、足りないよこれじゃー！！おかゆたべたいね、うん。リゾットでもいいな、ああお腹すいた・・・。

「ねエねエ、足りないよこれじゃ。」

「ですが、風邪ですからお腹に優しい物でなくては」

「リゾットは？」

「「「りぞっと？」」」

「ないの！？」

「聞いたことないよな。」

「うん、この国にはないんじゃないかな？」

「どんなものなんですか？」

「私も気になります！！」

何て説明すんの!! ああこういうときに馬鹿って実感する(泣)
どうしようどうしようどうし・・・絵で説明しよう!!

「紙とペン頂戴。」

「はい。・・・どうぞ。」

「うんとね、ここがこうで・・・米が重要なんだよ、そこでこうで、こうなって、うちではチーズ・・・こっちでいうペグをのせるんだけど・・・。」

ココまで説明してやっと気付いた。米あんのかな? あああああ!!
! なかったらどうしよう!!
米がないとかなったら作れない!! NO オオオオオオオオオオオオ
!!!!!! 一応聞いてみよう

「あ、あのさあ米ある?」

「「「こめ?」」」

「うん、こういう、白くって稲穂から取れて・・・ない?」

「シエル見たいな奴の事か?」

「かもね、サラ持ってきてもらっていい?」

「かしこまりました。」

「あ、ありがと~!」

よっしゃ!! もし米っぱいのだったらリゾット作ってもらおう!!
・・・あたしもう元気じゃね? 熱は・・・ないじゃん・・・元気じゃん!! いよっしゃああああ!!

レオたちになんて言ってみよう!!

「ねえねえ!!」

「なんだ?」

「熱引いたよ!! あたしもう元気!! だからなんかしたい。」

「一応病み上がりだろ? しかもウィザードに今日一日は大人しくしてろと言われたじゃないか。」

「だって暇なんだもん。」

「しょうがないよ、サツキちゃん。風邪がぶり返したらもつと嫌だろう?」

「・・・うんわかった。仕方ない諦めてあげよう。」

「なぜ上からなんだ?」

「気分。」

あゝあ、だめだった。

ひま~~~~~~~~!!!!!!

「おまたせいたしました。」

来たっ!!

「こちらです。こめに似てますか?」

「に、似てる!!!!!!!!!!!!!!」

すごい、同じだ色から形まで!! でも味は・・・

「ちょっと失礼。」 ㍡ パクツ ㍡

「「「えっ!?!」」」

「え?」

「な、何でそのまま食べるんですの!?!」

「いや、味はどうかなつと・・・」

「ふつー調理してから食うだろ・・・。」

「サツキちゃんの居たところではそのまま食べてたの・・・?」

「いや、炊いてたけどそのままでも味はわかるから・・・」

「「「へえ」」」

「で、味は似てるのか？」

「わかんなくなっちゃったからもう一粒・・・」

「どうですか？」

「似てますの？」

「不味くないか？」

「みんな落ち着きがないなあ・・・。」

「に・・・」

「「「に？」」」

「似てるうううううううう！！！！米だ米！！これで白米が、リゾットが食える！！」

「そ、そうか・・・。よかったな・・・？」

「うん！！良かったよおおおお！！サラ、ありがとう！！」

「いえいえ、どうってことないですよ。」

ふっふっふっ、これでリゾットが食べれる。早速頼もう！！！！

「サラ、早速で悪いんだけどリゾット作って！！」

「はい、かしこまりました。」

「あ、俺も。」

「あたくしも！！」

「俺も俺も」

「作るのは俺だけだな」

「「「「・・・え？」」」」

「よっ」

「エ、エドワード・・・」

「なに、忘れてたみたいだな顔してんだ。しかも全員。」

「「「「ソ、ソナカオシテマセンヨ？」」」」

「そーか？ま、別にいいけど。」

「てか、あんたいつの間に来たのよ！！」

「今。騒がしいなあと思ってきたらここだったというわけだ。」

「ああ、ソレハシツレイシマシタ。」

「ゼッテー思ってたねーな、あんた」

「いいからさっさとつくってこいよ」

「それ人に頼む態度か？ま、いいや。作って来る。」

「」「」「よろしく（おねがいします）」「」「」

あゝ楽しみ！！

9、久しぶりの割に登場時間少ないね！（後書き）

読んでくださりありがとうございます！！

最近ですね、新しい登場人物に悩んでいます。こういう奴出して！！
みたいなのがあった

ら、教えて頂きたいので、よろしくおねがいします！！！！！！！！

サツキ…「なんでリゾット食べてから終わんないのよ！！」

レオ…「作者の都合だ。」

アイム…「納得いくようないかないような、だね。」

サツキ…「作者のKY！！」

レオ…「わかってやれ。」

アイム…「レオKYの意味わかってる？」

レオ…「知らん！！」

サツキ…「胸はって言う事じゃないよね？」

レオ…「うるせっ！！」

10、ついに!!

エドワードにリゾットの説明を一通りしてから30分くらいたった頃とてつもなくいいにおいがしてきた!! リゾットの香りだ!! は・や・く・た・べ・た・い!!!!!!

「おいおいおいおい・・・よだれが滝のように流れおちてるぞ? サツキ・・・」

「・・・ハッ!! まだ!? 早く食べたいいいいい!!」

「サツキちゃん、お、落ち着いて? ね?」

「落ち着けないよ!! 好物がもうすぐ来るんだよ!? お腹ぺこp」
ガチャ

「おまたせしま」|| ビュン || 「!?!」

「成功した!? 食べれる!? てか食わせろ!!」

「落ち着けよ、食いものは逃げない。」

「ちえ、エド坊のくせに・・・」

「エド坊って何だ、その呼び名はやめろ。恥ずかしすぎる・・・。」

もうそういうのどうでもいいから早くしてよ!!

おなかすいた!!!!

・・・ふう。あたしは落ち着きを取り戻し、みんなと一緒に椅子に座った。

「エドワード、早く!!!!」

「・・・おまたせいたしました。リゾットでございます。」

「イタダキマス!!」|| パク、もぐもぐ ||

「意外とうまいな。」

「そうですわね、ペグがトロツとしていておいしいですわ。」

「ツイルーとのハーモニーが絶妙ですね。」

10、ついに!! (後書き)

読んでくださりありがとうございます!!

いやゝエドワードもサツキ争奪戦に参加です (笑)

次回はどんな話にしようかな!! or z

10、5、夢

「私は．．．．だからあなたとは．．．．いんだ!!」

「俺は君と．．．いたいんだ!!」

誰．．．．？

「私だってあなたといたいんです、でもいつ死ぬか分からないから!!」

「そんなこと関係ねえよ!! いつだって俺が守るから!!」

何のこと？ なにはなしてんの？

「でも!! でも私は女戦士、ベラトリックスなのよ!？ あなたが私を守るんじゃないかって、私があなたを守るの!! だから、この大規模な戦争の中、私が抜けたらどうなる!？」

「それは．．．．」

「．．．．大変なことになるでしょう？ だから諦めてください。」

「．．．．来世だ。」

「は？」

「来世また会おう、そして、もし君と巡り合えたなら．．．」

「．．．はい。わかりました．．．女戦士ベラトリックス、来世また会うことを主君に誓い、国のため、主君のために戦う事をここに誓う。」

「よし!! 行くぞ!!」

「はい!!」

「・・・・・・・・！！夢・・・・・・・・か。」

あの二人は誰？何の話？あたしは何も知らないのに、夢なはずなのに
あの話を

あの男の人の顔を
懐かしく思うのは・・・

どうして？

10, 5、夢（後書き）

読んでくださりありがとうございます！！

次話はどうしましょう、考え中です！

次話もよろしく願います！！

レオ…「なあ→の話ってあれか？」

アイム…「ほいよな。あれだろ？戦争で自分が死にそうになっても当時の国王を守ったってゆー美人戦士ベラトリックスの話だろ？」

レオ…「女戦士な・・・。」

アイム…「いいじゃん、いいじゃん！！細かいことは気にすんな！！」

エド…「そーいえば、サツキってベラトリックスに似てる。」

レオ、アイム…「・・・え？」

11、サラのキャラがあああああ!!!!!!

「はぁ〜・・・。」

「どうしました？」

「いや、変な夢見てちよつと寝不足というか？」

「どんな夢を見たんですか？」

「ん〜とね・・・」

あたしはサラにどんな夢を見たか話した。

王族っぽい人とベラトリックスという女の人が出てきたこと、王族っぽい人のことを懐かしく思ったことも、全部。

「ベラトリックスという名前の女性が出てきたんですか？」

「うん、それがどうかしたの？」

「『女戦士 ベラトリックス』という名前の話があるのを知っていますか？」

「ううん、知らない。」

「え〜とですね・・・、昔このアーノイド王国と隣国のカイティアという国は戦争をしていたんです。あ、隣国と言ってもリランキルト様がいるところではないですよ。で、戦時中・・・」

え〜とサラの話は長くなるからカット!! まあ簡単に説明すると、アーノイドとカイティアは戦争しました。その戦争中に当時の国王サイラスとその国王付きの女戦士（もしくは女剣士）ベラトリックスは恋に落ち、サイラスはベラトリックスを口説いたがベラトリックスは拒否りました。しかしサイラスは諦めきれず、来世にまた会うという約束をベラトリックスとした。その後2人は戦争に出てベラトリックスは命がけでサイラスと国民（他の兵士も含む）を守り、死ぬ直前まで戦士としてサイラスのために尽くしました。のち

にベラトリックスは伝説の英雄となり語り継がれた。
という話だそうでサラはこの話が大好きみたいだ・・・。
話してる時目がキラッキラに輝いてたよ。あれはびっくりした・・・。
。鼻息荒かったし!!!

「話の内容はわかっていただけましたでしょうか？」

「うんわかった、よくわかった。」

「そうですか!! それは良かったです!! 他に夢を見てて気づいた
事ありますか？」

「うーん、あのサイラスってひと誰かに似てたんだよね・・・。」

「誰でしょうね。所で私思ったんですが、もしかしてサツキの前世
ってベラトリックス様なのではないでしょうか？」

「いやいやいやいや・・・ない・・・ないよ!!!! 絶対ない
イイイ!!!!」

「絶対とは言えませんわ!! そうですわ、確かめましょう!!」

「ええええええ・・・。」

「サツキに拒否権はありませんよ？」

「ええええええええ!!!!」

サラってこんなキャラだっけ!? なんかもっと・・・ねえ!? 読者
のみなさん!?!?
違かったよね!?

いや、それよりなにより前世話まえた気が・・・ああ!!
あのうさんくさい神!! なんか前世にいい事をくく的なこと言っ
た気が・・・H A H A H A H A、そんなわけないよね!? ね!?

「さあ!! 早く行きましょう!!」

「行く気満々!?!」

なんかこのはなS・・・この会話展開速くない!?

頭がついていかないよ……!!

11、サラのキャラがあああああ!!!!!! (後書き)

読んでくださりありがとうございます!!

今回はサラのキャラ崩壊でした(笑) 次回!! サツキの前世は誰なのか!!

サイラスに似ている人物とは!!

サツキ..「あのーホントに行くの・・・?」

サラ..「あつたりまえですよ!!」

レオ..「おい、サラどうしたんだ?」

サツキ..「なんかベラトリックスとサイラスの話してたら興奮しちゃって。」

レオ..「・・・初代サイラス国王の話をしたのか?」

サツキ..「うん? (汗)・・・とりあえず次回もよろしくね!!」

12、マ、マジで!?

「着きました、ここはベロニカの泉です。サイラス国王とベラトリックス様はこの場所で誓いを交わしたそうです!!」

「そ、そうなんだ・・・。」

「そうなんです!!!」

目が、目がああああ!・・・輝いてる。すげえ・・・。この話相当好きなんだなあ。

てかこの泉でどうやってわかるんだろう・・・。

「泉に手を付けるとわかるんです。」

「・・・読心術!？」

「はい。」

「サラ・・・、恐ろしい子!!」

「嘘ですよ、できるわけないでしょうそんなこと。」

あるえ? サラってこんなキャラだっけ!? ホントに!! マジで!! すんげー疑問!!

これが本性!?!・・・もしかしてあたしの前世がベラトリックスかどうか早く知りたいだけとか?

まさかねえ! そんなわけないよね・・・そn

「さあ!! 早くやりましょう!!」

んなわけあるっばいね!!! あ、目からなんかしょっぱい水が出てきた・・・、涙? そんなもの知らないわ!!

「どうやるの?」

「はい、まず泉に手を付けて目をつぶります。」

「うん。」

「これでいいです、ただし余計なことは考えないでくださいね!!」
「う、うん・・・。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

「なにかうかんでまいりました!!」

「どれどれ!!」

「この人は・・・!!」

「ああ・・・。」

「ベラトリックス様ですわ!! やっぱり前世はベラトリックス様でしたよ!!」

「ホントだぁ・・・(汗)」

「っていう事はですよ、前世がサイラス国王の方もいるかもしれないんですよ!!」

そうだった・・・。会う約束してんのにベラトリックスだけ来世に来るわけがない・・・。

「でも、王宮にいるとは限らないよね!! 今までだって会ってないわけだからもしかしたら今回も・・・ってあれ!? みんな、いつの間に来たの!？」

「サラに呼ばれて来た。」

「何でみんなを呼んだの!？」

「もしかしたらこの中に前世がサイラス国王の方がいらっしやるかも知れないでしょう!! 私は昔からサイラス国王とベラトリックス様の生まれ変わりの方にお仕えするのが夢だったんです!!」

「「「へえ」」」

「ですから皆様!! 早くやってください!!」

「「「はいはい」」」

「ではウィルザード様から」

「なにかうかんでまいりました。」

「・・・・・・。」

「ブッ！！くっははははははは！！」

「5代目国王ミノイズの母君だな、シュ克蘭様だ。」

「お、女・・・・！！ふ、はははははは！」

「エド、いい加減にしろよ？」

「あゝはいはい、じゃ、次俺だな。・・・・こいつは・・・・」

「先代の女騎士団団長キルウィだな、おまえも女じゃないか。」

「ちっ！！」

「えゝっと、次はアイル様。」

「はいはゝい☆・・・・・・。この人は？」

「ベラトリックス様のご友人のグロリサオ様です！！グロリサオ様はベラトリックス様が好きだったんですけど、ベラトリックス様は友人としてしかみていなかったため自分の感情を抑えて友人としてベラトリックス様を支えたとても優しい方なんです！！」

「そ、そうなんだ（立ち位置今の俺と一緒にゃん！！泣）」

「最後に殿下、どうぞ。」

「あ、ああ。・・・・・・。」

「何か浮かんでまいりました！！」

「これは・・・・！！」

「「「「え？」」」」

「ええええええええええええ！！！！！！！！！！！！！！」

「「「「サ、サイラス国王！？」」」」

「俺は知ってたぞ、王族は生まれたときに前世を調べるからな。」

「な、何で言ってくれなかったの？」

「サツキがベラトリックスだとは思わなかったんだよ。」

「そっかゝ、そりゃそうだよね。まあサイラス国王の現世もわかった事だし帰りますか。」

「え？ 婚約しないの？」

「は？ なんで婚約すんの？ 前世の事は前世の事、現世の事は現世の

事。前世で約束したからって今婚約することないでしょ？それにレオはあたしじゃいやでしょ、もっと美人の方がお似合いだよ。」

「そ、そんなこと」

「いーっっていーっで、気いつかわなくて。それよりお腹すいちゃったご飯食べよ。」

「お、お前なあ！！！！」

「あゝお腹すいた。」

「「「「・・・。。。。」」」」

「おいそこ！！笑いを押し殺してんじゃねえ！！！」

今日も平和だ（笑） by 作者

13、え〜っと、ご兄弟でいらっしゃいますか？

「本日のご昼食はイロシンでございます。」

「いただきます！……。なんか体に良さそうな味だね……。」

「ああ、これはシンっていう野菜がいっぱい入ってるからね。ちょっと苦いかも。」

ちよっとつてもんじゃあないよ！？なんか青汁にゴーヤをたっぷりいれた感じの味だよ……。に〜が〜い〜！！無〜理〜！！

「無理しなくてもいいぞ？」

「だ、だいじょぶだし？何言っちゃてんの、レオ。意味不なんだけど〜！！！」

「無理してるのが見え見えですわよ、サツキ。」

「そーゆーリラだってムリしてんじゃないの〜？」

「そ、そんなことありませんわ！！ちゃんと食べれますわ！！」

「あたしだって！！」

「何を競ってるんだ？あいつらは。」

「さあ〜？俺にはよくわかんないよ。」

「~~~~~っ！！もームリ！！」

「あたくしもですわ！！」

「「に〜が〜い〜！！！！！！！！」」

「2人とも無理して食べるからだよ、サラ、水持ってきてくれる？」「かしこまりました。」

あ〜！！口の中があ〜~~~~！！

うおえっぷ……。にが〜！！あ〜も〜食べなきゃよかった！！

あ、水来た！！

「ごくごくごくごく……ぷっはー！ー！ー！」

「くすくす……、いい飲みっぷりのお嬢さんだね。」

「誰だ！！」

「おっと、あぶないなあ、レオ。実の兄に刃物に向けるなんてひどいよ？」

「で、殿下！！」

「え？殿下ってレオの事じゃないの？」

「違う、王位継承者は俺だが双子の兄がいる」

「ふ、双子の兄なんていたの！？（兄ちゃんの方の顔もさぞかしきれいなんでしょうね！！）」

「ああ、だが、この国は王位継承者を魔力の強さで決めるんだ。それで俺の方が魔力が強くて王位継承者が俺になったんだ。」

「魔力ってことは魔法？でも、医療が比較的発達してるから魔法は普通ないんじゃない？」

「？……何を言ってるかはよくわからんがとりあえず紹介する。ライラス、来ていいぞ。」

「やっと近づいていいわけか、こんにちは異世界から来たお嬢さん。ライラス・アーノイドって言いますよろしく。」

「はあ、もうさあ……ホントにさあ、なんなの！？」

「えっとー？話が見えないんだけど？とりあえず襟離そうか？（で、いいの？）」

「ああ、すいませんナンデモナイデス。」

「はあ。……サツキ、お前疲れてるだろ。部屋帰れ。」

「は？全然つかれ「帰れ？」……リョーカイ（；ーー）」

なんなのもう、いきなり怒ってさー！！わけわかめちゃんなんですけどおー！！

♪何でだろー何でだろーなんでだなんでだろー、ライラスさ

んの近くにいたらレオが怒ったなんでだろお〜♪
あ〜も〜なんか疲れた〜

13、えーっと、ご兄弟でいらっしゃいますか？（後書き）

読んでくださりありがとうございます！！
次回もよろしく願います！！！！！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4141x/>

どうにかなるよね！てか何が何でもどうにかする！！

2011年11月11日23時59分発行